

315) 我が部長殿

我が部長殿は女性である。創業者の一族で、なかなかの美人ではあるがバツイチで、しかも性格はとても女とは思えない。それ故、男性社員にとっては付き合いやすいところはあるのだが、イマイチというより、イマサンぐらい魅力に乏しい。ところがそんな年末のある日、部長殿がえらく艶かしいイデタチで出社と相なった。もちろん化粧っ気はないのだが、コートを脱いだところが、なんとも夜の舞踏会の雰囲気なのである。部長殿のお住まいは会社から徒歩で10分ぐらいの所だから、夜の会合などがあると一回自宅に戻って着替えてくることも多く、どんな舞踏会があるにせよ、会社にこんなイデタチで現れることは初めてのことで、それはもう会社中の噂になってしまった。私はそんな部長殿と顔を合わせると、「おはようございます。ところで今朝のコスチュームは一段と艶かしく、今夜はどちらで忘年会ですか？」

とちょっと冷やかしてみた。部長殿はずっと考え事をしていたらしく、私の問いかけに急に我に返って曰く、

「あらっ、私ったら、どうしたんでしょう。ネグリジェで会社に来ちゃった！」とまあこのように仰ったのでありました。

